



『勇気づけの教育』の推進

自己肯定ペンギン
かおあげて
むねはって
ちょっと
せのびしていこ
うよ



【基本理念】 本市の子どもたちの将来が、生まれ育った環境によって左右されることなく、一人の人間として尊重され、安心して学び、自分のよさや可能性を広げる学校づくりを目指す。

学習指導要領の前文では、2030年以降の社会を見据え「一人一人の幼児児童生徒が、自分のよさや可能性を認識するとともに、あらゆる他者を価値ある存在として尊重し、多様な人々と協働しながら様々な社会変化を乗り越え、豊かな人生を切り拓き、持続可能な社会のつくり手になることができるようにすることが求められる。」とこれから育てる幼児児童生徒像が示されています。また、県学力向上推進5か年P P IIでも「自己肯定感の高まり」を学力上の重要な視点として位置づけています。

勇気
とは

困難を克服する力
～あと一歩前へ進む力～

○不確定な部分があるが
チャレンジする決意

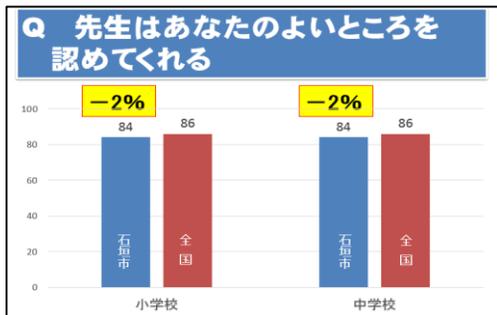
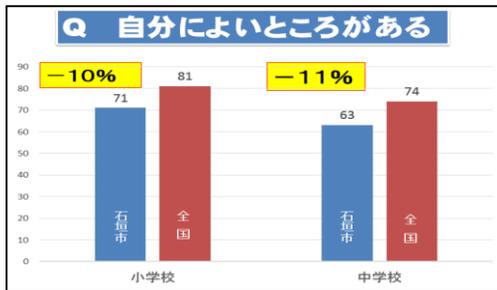
○立ち向かえば克服できる課題と捉え
努力する決意

○目標達成に向かって**協力する決意**

勇気のある人は**自己肯定感**が高い

本市では、児童生徒の自己肯定感や自己有用感を高め、支持的風土のある学級づくりの充実を図るため、児童生徒への『勇気づけの教育』を推進します。勇気づけの「勇気」とは、命がけで何かに向かっていくような勇気ではなく、『困難を克服する力』、あと一歩前へ進む力として捉えます。具体的には、先が見えないけど、チャレンジしてみよう。壁は高いけど、努力すれば克服できる。一人では厳しくても協力すれば大きなことも成し遂げられる等の覚悟になります。この勇気がある人は、自己肯定感が高い人になります。自己肯定感の高い人は、自分自身でこの勇気づけができ、この判断や行動ができます。

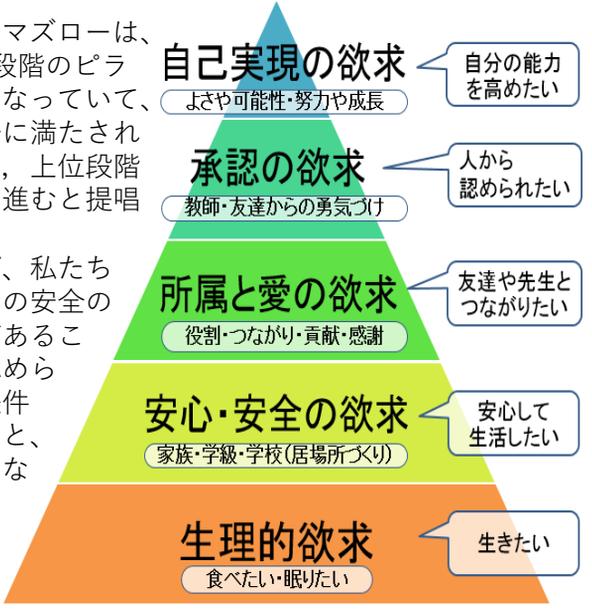
R1全国学力・学習状況調査から



「自己肯定感」に係る項目の回答は全国と比較すると低く、教師と児童生徒の信頼関係や児童生徒相互の温かい人間関係を育む必要がある。

マズローの欲求5段階説から

アブラハム・マズローは、人間の欲求は5段階のピラミッドのようになっていて、下位段階が十分に満たされることによって、上位段階（自己実現）に進むと提唱しました。簡単に言えば、私たちは生命維持、身の安全の保障、居場所があること、そして、認められることの諸条件が満たされないと、人は自分らしくなろうとする願いが出てこないこととなります。



本市においても子どもの貧困、離婚、ネグレクトの増加等で、下位欲求の満たしが十分でない子どもたちが多数います。こうした欲求の諸条件が満たされていないと人は誤った目標を設定してしまい、誤った行動をしてしまいます。まずは、学級・学校に児童生徒が安心できる居場所をつくりましょう。

やる気を育てる『承認』

人は、生まれながらに認められたいという承認欲求を持っています。児童生徒は他者からの承認を得て、自分は価値ある存在と認識し、勇気を持って生きていくことができます。

正しく効果的な承認を行うと「自己肯定感」と「自己有用感」が高まり、やる気が育ち自発的に努力し、成長するようになります。承認には5つのレベルがあります。

承認の5つの視点

◎存在承認（存在自体を認める承認）

・挨拶をする。・名前を呼ぶ。・声をかける。・話を聴く。・気遣う。・役割を与える。

◎意識承認（心がけや行動しようとしていることを認める承認）

・チャレンジの姿勢が素晴らしい。
・相手への気遣いがいいね。

◎行動承認（具体的な行動を認める承認）

・いつも積極的に手をあげてくれるね。
・いつも活発に遊んでいるね。

◎成長承認（成長や変化等に対する承認）

・以前よりも上手になったね。
・進んで取り組めるようになったね。

◎成果承認（成長を認める承認）

・最後まで諦めずにやり遂げたね。
・目標を達成したね。・成果を讃える。

3つの立場での承認

◎YOUメッセージ（主語があなた）

「あなたは、〇〇ですね。」

・元気がいいね。・よくがんばったね。・上手だね。（児童生徒の成長や成果をダイレクトに伝えることができます。）

◎Iメッセージ（主語が私）

「私は、〇〇と思っている。」

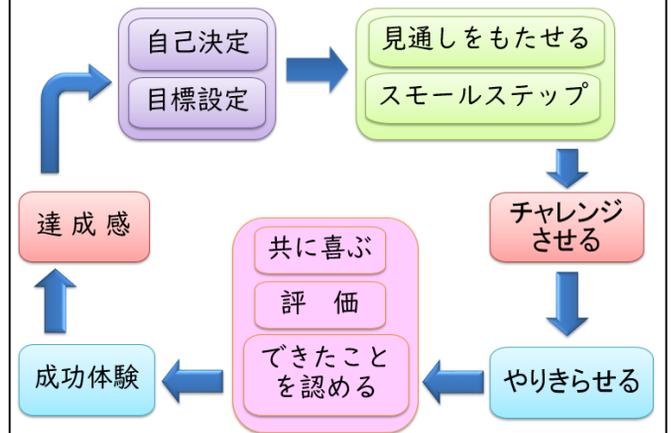
・あなたが意見を言ってくれて私は嬉しかった。私は感動した。私は元気づけられた。（児童生徒に教師の思いや意見を共有することができ、絆を深めることができます。）

◎WEメッセージ（主語が私たち）

「私たちは、〇〇と思っている。」

・正直に話してくれたので、私たちは嬉しかった。あなたは、私たちの誇りだ。（児童生徒に学級や仲間になんか影響を与えたか伝えることができる。）

「自己肯定感」を高めるサイクル



【自己決定】自分で学習内容を決めさせることで、学習に責任感を持ちます。また、自分自身で決めることが最後までやり通す力になります。

【スモールステップ】児童生徒の実態にあった課題を設定することが大切です。易しすぎても難しすぎても「自分ががんばったから出来た」という達成感を得られません。

【チャレンジ】「自分ががんばらなければ学習や活動が進まない」という状況をつくりながら、主体的な行動や思考を促します。

【やりきる】最初から答えを与えるのではなく、まずは、児童生徒が自らやろうとしていることが重要です。自分のペースで学習を進めさせることで、理解や定着を図り、やりきる力を育てます。

【共に喜ぶ】自己肯定感を育む上で、「自分でやった」という成果を、先生や友達から認められる状況をつくるのが何より大切です。

【成功体験】「自分の力で出来た」という成功体験によって、主体性や自己肯定感を高めます。

【達成感】児童生徒が自分の学び（履歴）を自分の言葉で振り返ることができれば、成長を実感し、自信を持つことができます。

【目標設定】児童生徒は、勇気づけ「認めて、褒めて、励ます」ことによって、新たな前向きな気持ちになります。

【参考図書・資料】

○「優れた教師の省察力」著：久我直人 ○「潤いのある学級・学校づくりの理論と実践」著：久我直人 ○「自己有用感・自尊感情を育てるコーチングアプローチ」著：神谷和宏 ○「先生のためのコーチングハンドブック」著：神谷和宏 ○「プロ教師の最強コーチング術」著：中土井鉄信・井上郁夫 ○「自己肯定感を高めるための支援プログラム（神奈川県教育委員会）」 ○「自己肯定感に関する一考察（京都府総合教育センター）」 ○高めよう自己有用感（栃木県教育センター）

自己肯定感とは

- 自分の可能性を信じ、自分はできるんだという自信を持ち、肯定的に自己認識すること。
- ありのままの自分を受け止め、自己否定的な面も含めて、自分が自分であって大丈夫という感覚。
- 他者との比較でなく、自己内完結である。
- Very goodよりもVery enoughの感覚。
- 生きる力を下支えする「自分らしさ」の感覚。

自己有用感とは

- 誰かの役に立てたという 成就感や誰かから必要とされているという満足感のこと。

「自己肯定感」が高い子どもは、「自分が価値ある存在である」と感じていたり、自分に自信のある子どもだと言える。その特徴としては、様々な物事に取り組む意欲が高いことがあげられる。

「勇気づけの教育」実践構想図

自己肯定感・有用感を高める学級・学校経営

承認（児童生徒間をつなぐ） = **勇気づけ**

所属（絆づくり）

認め合う取組

協力・貢献

感謝 人権

安心（居場所づくり）

安心・安全

間違ってもよい
雰囲気づくり

規範意識の醸成

自立

よさや可能性の自覚

夢や希望

目的意識

受容する
共感する
励ます
勇気づける
見通しを持たせる
自分で決定させる
挑戦させる
活躍の場を与える
責任を持たせる
やりきらせる
認める
否定しない
比較しない
責めない

全職員で共有

担任 養護教諭

SC 学年・教科

部活動顧問

確かな児童生徒理解

一人一人の存在を尊重する態度

一人一人をよく見る

聴く

対話

保護者との協力



児童生徒が学校・学級で安心して学ぶためには、「大事にされている」「尊重されている」等、心理面において安心と感じていることが必要です。ありのままの自分であることが保障され、排除される心配がない「心の居場所」がある状態が大切です。

そのために、教師は児童生徒一人一人を深く理解し、その小さな変化を見逃さず、愛情と信頼と期待で包み込みながら、受容的・共感的に関わることが大切です。また、様々な要因により困難な状況に置かれている児童生徒や、特別な配慮を必要とする児童生徒においても他の教員、保護者や専門家と連携し、確かな児童生徒理解のもと適切な支援を行うことが大切です。

学級においては、日常的に「互いに認め合う取組」「互いに尊重し合う取組」を展開し、安心できる居場所づくりを行うとともに、「必要とされる・役に立つ」という協力・貢献・感謝の機会をつくり自己肯定感・自己有用感を育てます。

このように児童生徒が自己肯定感を持つことで、自分のよさや可能性を自覚し、様々な活動に積極的に取り組むことができ、夢や希望に向かって歩み出します。また、困難に直面しても粘り強く対処できるようになります。さらに、自分が他者から肯定的に認められている児童生徒は、他者を肯定的に認められるようになり、「心の居場所」は確固としたものになります。

このような状態になれば、児童生徒は、自分の力を十分に発揮し、多少の失敗にも挫けず、成長することができるようになります。そのための支援「勇気づけ」を、教師は学ぶことが重要です。

「安心感」こそが最優先課題

児童生徒の自己肯定感を高めるためには、教師と児童生徒の心が通い合い、「安心感」のある豊かな人間関係を築くことが基本となります。

児童生徒の中には、家庭的な問題を背負っている子も多く、幼いときに親や周りの大人から、不安を煽られることで行動を促され、成長してきたという経験を持っている子もいます。

教師がその児童生徒の家庭的な背景を読み取った柔軟な対応をしなければなりません。教師の対応が、その児童生徒の人間性や社会性の醸成につながることを肝に命じなければなりません。

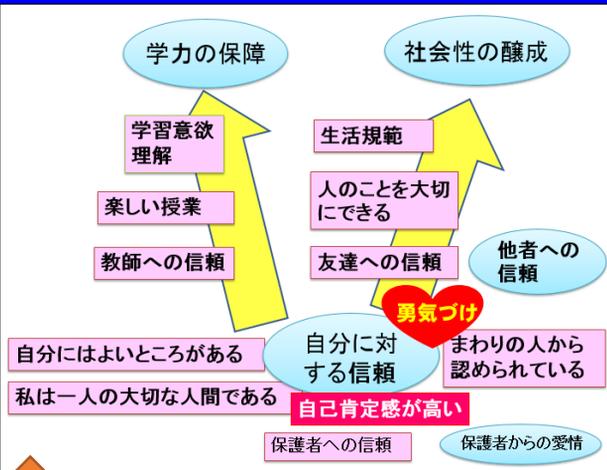
児童生徒の捉え

- 児童生徒は、よくなりたいと思っている。
- 児童生徒は、わかりたいと思っている。
- 児童生徒は、認められたいと思っている。
- 児童生徒は、役に立ちたいと思っている。
- 児童生徒は、伸びたいと思っている。
- 児童生徒には、無限の可能性がある。**

「勇気づけの教育」がめざす教師像

- 児童生徒の「よさ」や「可能性」に気づき、価値づける教師。
- 児童生徒の中に内在する問題を読み取り、解釈し、改善する教師。
- 個の状態、集団の実態を読み取り、解釈し、改善する教師。
- 児童生徒との生活の中で、人として大切な価値や正義を見取り、価値づけることを積み重ねる教師。

「勇気づけの教育」で身につけさせたい力



学校教育の目的は「子どもが社会で生きていけるようになる（自分で考え、行動できる。周りの人と仲良く力を合わせて活動ができるようになる。）」ことです。そこで、本市では「**自分を伸ばす力＝主体的に学ぶ力**」と「**人とかかわる力＝社会性**」を育成していきます。そのためには何より「自分に対する信頼」が児童生徒の成長のエネルギーになります。教師が児童生徒の「よさ」を受け止め、勇気づけ「受容や共感」「承認や賞賛」することが、その児童生徒の内面を整え、自分への信頼を高めます。勇気づけ教育で、「自分への信頼」（自己肯定感）を高めることが、学力向上だけでなく、不登校対策、いじめ対策の根本的な解決にもつながっていくと考えます。

確かな児童生徒理解

観察

児童生徒を一人一人を先入観や思い込みを持たずじっくり観察すれば、自然とその子に興味・関心が湧いてきます。そして、今どんな働きかけが必要か自ずと見えてきます。そこから肯定的な評価やよい質問も生まれてきます。

「傾聴」とは

こちらが「聞きたいことを聞く」ではなく、「相手が言いたいこと、分かって欲しいこと」を受容的・共感的態度で「聴く」ことです。評価や助言より、まず聴くことが大切です。

【聴き上手になるためのポイント】

○態度

- ・相手に顔・体を向け、目線を自然に合わせ「全身であなたの話を聴いている」というメッセージを伝える。
- ・あいづち、うなづきで聴いていることを示す。
- ・ゆっくりした口調で、リラックスして話しやすい雰囲気をつくる。

○心構え

- ・反論・批判はせず、児童生徒のそうせざるを得ない気持ちを理解する。
- ・児童生徒の言ったことや感じたことを繰り返したり、教師の言葉で伝え、共感的に聴く。
- ・児童生徒の声の調子、表情、姿勢、手や目の動きにも気を配る。

傾聴と共感

「共感」とは

聴き手の価値観や先入観にとらわれることなく、児童生徒の体験・価値観を理解しようとすることです。

共感

≠

同感

あなたはそう感じるのね
主語が「あなた」
あなたと私、違ってもOK
相手意識 距離感

私もそう感じる
主語が「私」
あなたと私、同じである
親近感

「傾聴」「共感」してもらえることで

- ① すっきりできる。
- ② 担任との信頼関係が深まる。
- ③ 自己理解が深まる。
- ④ 問題解決に向かえる。
などの効果が得られます。

